

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	九州における弥生時代石製装身具の導入と展開
Author(s)	大坪, 志子
Citation	熊本大学社会文化研究, 4: 151-170
Issue date	2006-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/2916">http://hdl.handle.net/2298/2916</a>
Right	

## 九州における弥生時代石製装身具の導入と展開

大 坪 志 子

### はじめに

勾玉・管玉と称される石製装身具が、縄文時代・弥生時代・古墳時代（一部歴史時代）の長い間、人々を飾っていたことは既に知られたところである。縄文時代に、縄文人によって生み出された石製の装身具は他にも知られるが、それらは一定の盛行を見た後消え去った。勾玉と管玉のみが、縄文時代から弥生時代へと移行するにあたっての生業をはじめとする様々な社会変化を挟んでも、両時代に存在した。縄文系・弥生系と称される玉である。

弥生時代の勾玉について、森貞次郎（1980）が縄文系と弥生系という二つの大きな枠を設定し、さらにそれぞれ3型式・4型式を設けて形態的变化を示した。このとき使用された形式の名称は現在に至るまで、その基本となっている。森は、丁子頭勾玉と定形式勾玉の形の基本は、縄文系の獣形や緒締形にあるとし、その上で形が洗練されるのは外来の要素の影響とした。これを受けて、木下尚子は弥生時代の勾玉を体系的に整理し（1987）、縄文系との関係を明確にした（1999・2003）。

管玉については、森（1982）が碧玉製の管玉は朝鮮半島無文時文化の所産であり、さらにその背後には遼寧式銅剣文化の控えていることは指摘したが、所謂縄文管玉については漠然と東日本のものではないかというにとどまっている。甲元（1992）は管玉の穿孔法を両側穿孔＝縄文系技術、片側穿孔＝朝鮮半島系技術、また胴部形態をエンタシス状＝縄文系、円柱状＝朝鮮半島系、と分けた上で、縄文人が管玉を装着するようになったのは、農耕民（渡来人および渡来文化を持つ人々）との区別のためであるとしながら、結局のところその方法において半島の影響と、管玉の意味づけを行い、松本（2000）・大坪（2003）は縄文時代の管玉および勾玉についても、朝鮮半島からの影響・伝播を念頭においている。近年、稲作農耕に先立ち、畑作農耕を行っていたことが縄文時代中期にまで遡ろうとしているが（山崎 2005）、甲元（2001・2004）は東アジアにおける稲作を含めた畑作農耕の拡散と西日本における勾玉や管玉の生産の開始とを関連付け、勾玉や管玉の開始を朝鮮半島南部地域の影響という見方を示している。

以上のように、勾玉・管玉の起源については縄文の伝統に求める見解と、農耕文化を背後に擁した大陸の玉器に求める見解がある。また、管玉については縄文時代と弥生時代の過渡期に朝鮮半島から影響を受けたのみか、遡って縄文時代の管玉の生産開始の契機が朝鮮半島からの影響とするか、外的影響のタイミングをどの時期に求めるか大きく分かれるところである。これは、甲元が指摘するように、玉類が農耕文化の一要素であり農耕の拡散と連動しているとする、玉類の動態を探ることは東アジアにおける農耕文化の拡散の動向の一端を探ることにとも関連する。

そこで、本稿では朝鮮半島から水稻農耕文化の影響を受けたことは間違いない縄文時代と弥生時代

の過渡期に注目する。縄文時代と弥生時代の過渡期をはさみ、縄文の玉類と弥生の玉類において何が変わり、何が変わらなかったのかを明らかにすることで、両時代の玉類がどのような文化背景を擁しているのかを明らかに出来ると考えるからであり、本稿では弥生時代の出土状況が明らかな墓からの出土品をもとに、使用状況と玉の持つ意味の変化を追ひ、弥生時代における玉類の開始の状況を把握し、縄文時代との連続性についての予察を行いたい。

### 1. 墓制からみた石製装身具の動向

弥生時代の石装身具と縄文時代の石製装身具の出土状況の顕著な違いは、前者が墓から出土することにある。ここでは、弥生時代に採られた様々な墓制と石製装身具との関係を見てみる。

#### 1.1 時期区分の設定

北部九州の代表的な墓制に甕棺墓がある。「土器」でもある甕棺墓は既にいくつかの編年がなされ、墓制のなかでは最も的確な時間軸を持つものである。したがって、ここでは甕棺墓の編年のうち橋口達也（1979）の編年をもとに、その他の墓制の副葬品をこれらに合わせて、次のように6つの時期に弥生時代を区分する。なお、前期前半には弥生早期とも称される縄文晩期の例も含めて検討する。

表1 時期区分表

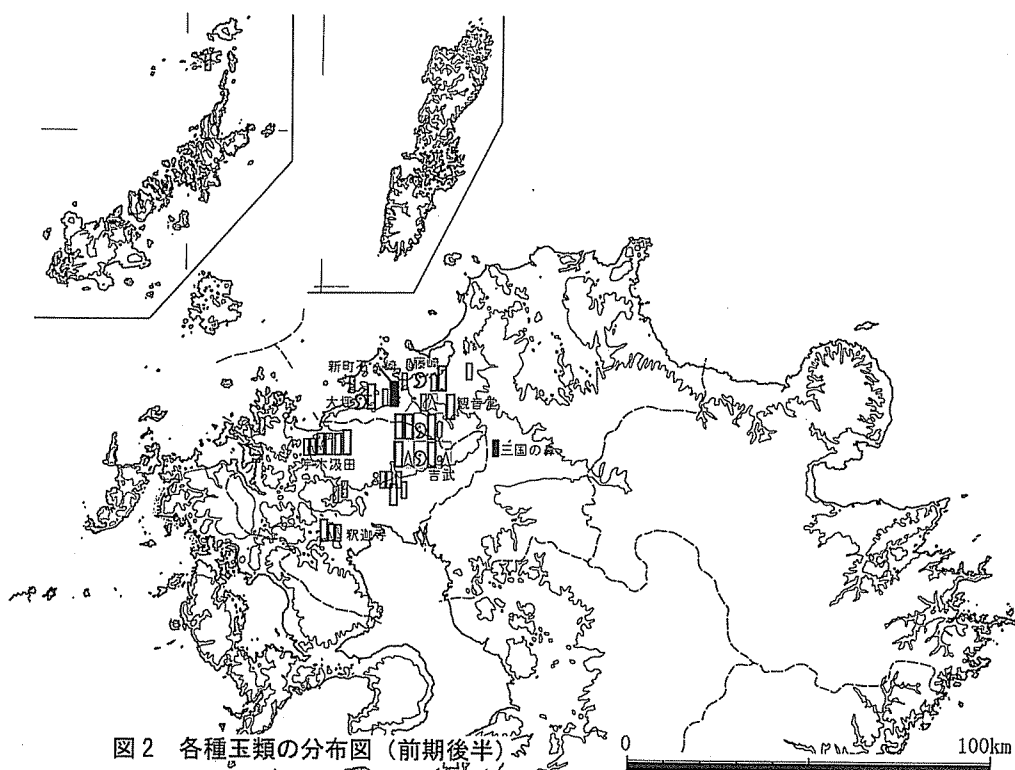
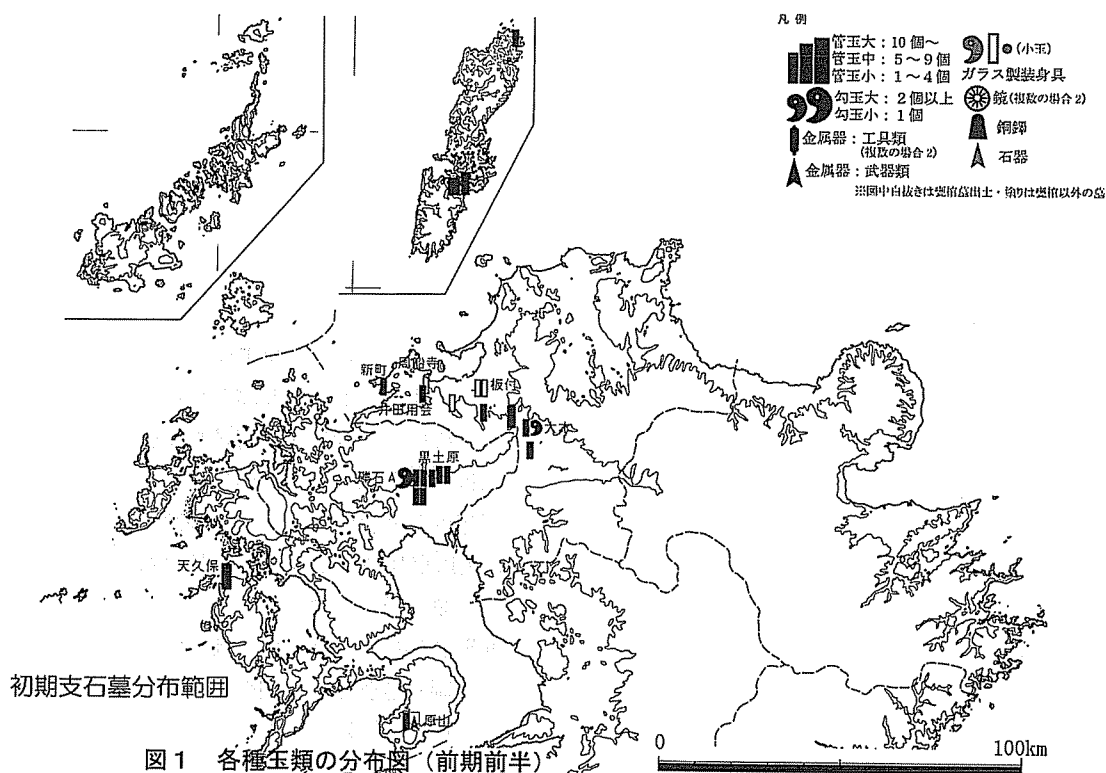
時期区分	含まれる甕棺型式
前期前半	弥生早期～板付Ⅰ式
前期後半	KⅠa～KⅠc式（伯玄式～金海式）
中期前半	KⅡa～KⅡc式（城ノ越式～汲田式）
中期後半	KⅢa～KⅢc式（須玖式～立岩式）
後期前半	KⅣa～KⅣc式（桜馬場式～三津式）
後期中葉～後半	KⅤa～KⅤf式（日佐原）

#### 1.2 時期ごとの墓制と副葬石製装身具

時期が分かる墓葬約360例について時期ごとに区分した。墓制のうち、石棺墓や木棺墓は大陸にその起源が求められるのは周知のことである。ここでは、北部九州で在地の弥生人が顕著に発達させた甕棺墓と、石棺墓・木棺墓・木棺墓の可能性を持つ場合が多い土壙墓の二つに大別した。記号は凡例に示したとおりで、個数は墓葬の数に対応させている。

**前期前半（図1）** これらの遺跡には、支石墓の主体部が含まれることもあり、分布は初期支石墓のそれと重なる。表2の前期前半をみても明らかなように、多くは石棺墓・石蓋土壙墓である。対馬を除く長崎と佐賀平野に分布する遺跡は支石墓である。福岡：大木遺跡は支石墓ではないものの、土壙墓に副葬小壺が伴うなど朝鮮半島の埋葬習俗を採用したことが明らかである。既に当該時期に始まる碧玉製管玉の使用は、朝鮮半島からの影響によることは確かになりつつあり、稲作農耕をいち早く受容・展開した福岡平野の人々も、こうした影響のものと、彼らの墓制に取り入れたものと思われる。管玉・勾玉は相伴しないが、どちらも見られる。

**前期後半（図2）** 北部九州において、甕棺墓の形成域が拡大する（藤尾 1989）とともに、福岡：石ヶ崎遺跡や佐賀：礫石A遺跡などのように支石墓の主体部にも取り入れられる。表2の墓葬別の玉保有表をみても、甕棺墓とそれ以外の墓葬の逆転が明らかである。当該期後半、金海式の時期には、吉武遺跡の大石地区・高木地区において一部は石製装身具を伴う青銅器の副葬が盛んになり始める頃である。福岡：三国の鼻遺跡は木棺墓である。北に隣接する筑紫野市や太宰府市域は、前期には木棺墓・甕棺墓・土壙墓が併存する地域であり、この影響を受けているのかもしれない。管玉の単独例が



多く、勾玉との共伴例は吉武遺跡で見られる。

**中期前半(図3)** 甕棺墓が最も隆盛する時期にあつてその他の墓制に石製装身具が伴う事例が再び増加する。唐津平野では宇木汲田遺跡が引き続き甕棺墓を造営し、天神ノ元遺跡も甕棺墓群を造営し始める。これに対し、佐賀平野・福岡平野以東では石製装身具が木棺墓や土壙墓に伴うようになる。佐賀：吉野ヶ里遺跡の丘陵Ⅲ区では甕棺墓1基に管玉が伴う。志波屋四ノ坪地区では約700基の甕棺墓が築造される中、100基程度の土壙墓と石棺墓8基が造られる。石製装身具を持つものは僅かに2基(当該期1基)だが、いずれも土壙墓である。佐賀：増田遺跡5区においても、甕棺墓の数はその他の墓制の約4倍であるが、木棺墓に副葬品が集中する傾向にあり、墓域も甕棺墓よりは限定的であつて被葬者の特殊性を窺わせる。福岡：吉武遺跡高木地区では、吉野ヶ里遺跡同様甕棺墓が造営される中、木棺墓を僅かに築造し、石製装身具と青銅器を副葬する。その厚葬ぶりは周知の通りである。福岡：南薫稲荷遺跡でも、甕棺墓が多数を占める墓域構造の中で、少数派の石棺墓に管玉が伴っている。表2をみても分かるように、保有個数が多いものには甕棺墓以外の墓葬の場合が多い。遠賀川流域以東は、基本的に甕棺墓分布圏からは外れる。宗像周辺は前期以来土壙墓・木棺墓を踏襲する地域であり(阿部1993)、図上には表現されないが遠賀川流域以東地域はこうした墓制の踏襲の上に、石製装身具を伴うようになったのだろう。やはり管玉が数・墓葬数ともに多い。

**中期後半(図4)** 中期前半同様、地域によって差が顕著である。唐津平野では、宇木汲田・天神ノ元遺跡で変わらず甕棺墓の造営が続き、石製装身具も多数副葬される。周囲の遺跡でも墓制は甕棺墓であり、これに伴う。唐津平野のさらに周辺では石棺墓(西尾A遺跡・みやこ遺跡)が築造される。吉野ヶ里では、墳丘内の甕棺墓にガラス製の管玉が伴うが、石製装身具(勾玉)は土壙墓1基のみである。福岡平野では、類例が減少するが、所謂奴国の王墓とされる須玖岡本遺跡が登場する。ここでは、勾玉・管玉はその素材がガラスになり、多くの青銅器とともに甕棺墓に副葬される。また、前原市の伊都国の王墓とされる三雲遺跡小路地区では、翡翠の勾玉とともにガラス製の勾玉や管玉も多数甕棺墓に副葬される。遠賀川流域及び以東の地域においては、各地で土壙墓・石棺墓が墓制の主体であり、僅かに遠賀川上流で立岩遺跡が甕棺墓群を形成する程度である。勾玉の数が急に増えるが、管玉との共伴は多くない。しかし、全体的には組合う例は増加した。

**後期前葉(図5)** この時期は甕棺墓が衰退傾向を見せ、墓制が土壙墓や木棺墓に転換し始める時期である。これを反映してか、福岡平野から佐賀平野にかけては木棺墓・土壙墓に副葬されるようになる。福岡：吉武遺跡の樋渡墳丘墓内の甕棺墓に、青銅器を集中的に副葬していたが、この段階になると木棺墓に石製装身具と鉄剣とを副葬している。唐津平野では、宇木汲田遺跡が長い甕棺墓群の築造の終焉を迎えるときである。対馬や壱岐などでも、石棺墓が築造される。全体的に現象・衰退傾向にある。前代に増えたガラス製品が、小玉に集約されてきた観がある。

**後期中葉～後半(図6)** 表2でも明らかなように墓制の転換でほぼ石棺墓・土壙墓に伴うようになる。方形周溝墓の築造などにより、階級の差が顕著になってくる分、副葬事例も増加する。

以上、墓制の転換という影響を除く、後期以前についてまとめてみよう。

前期前半、勾玉と管玉は外来の墓制である支石墓・石棺墓・土壙墓に伴うことから、縄文時代に見られなかったこれらの副葬行為は、朝鮮半島の埋葬習俗を取り入れたものに間違いはない。前期後半は、九州独自の甕棺墓への副葬習俗の拡大がある。支石墓の主体部にも甕棺墓を採用するなど、墓制の折衷からも、積極的に半島からの墓制とその習俗を受け入れたことが分かる。中期前半、唐津平野では、



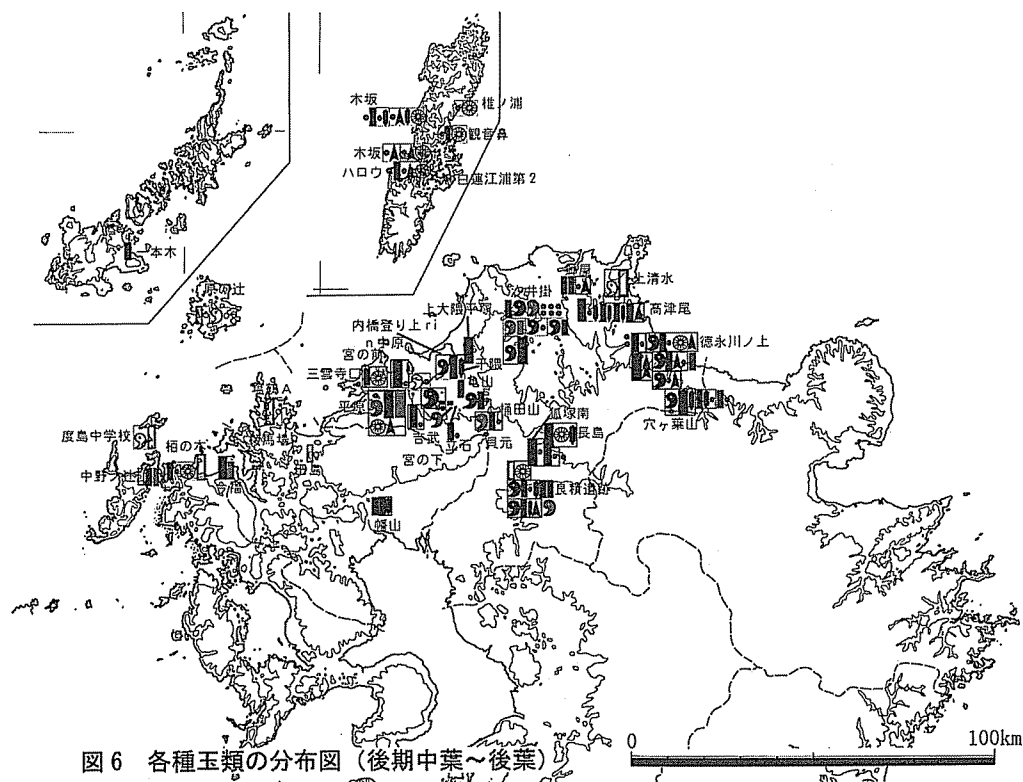
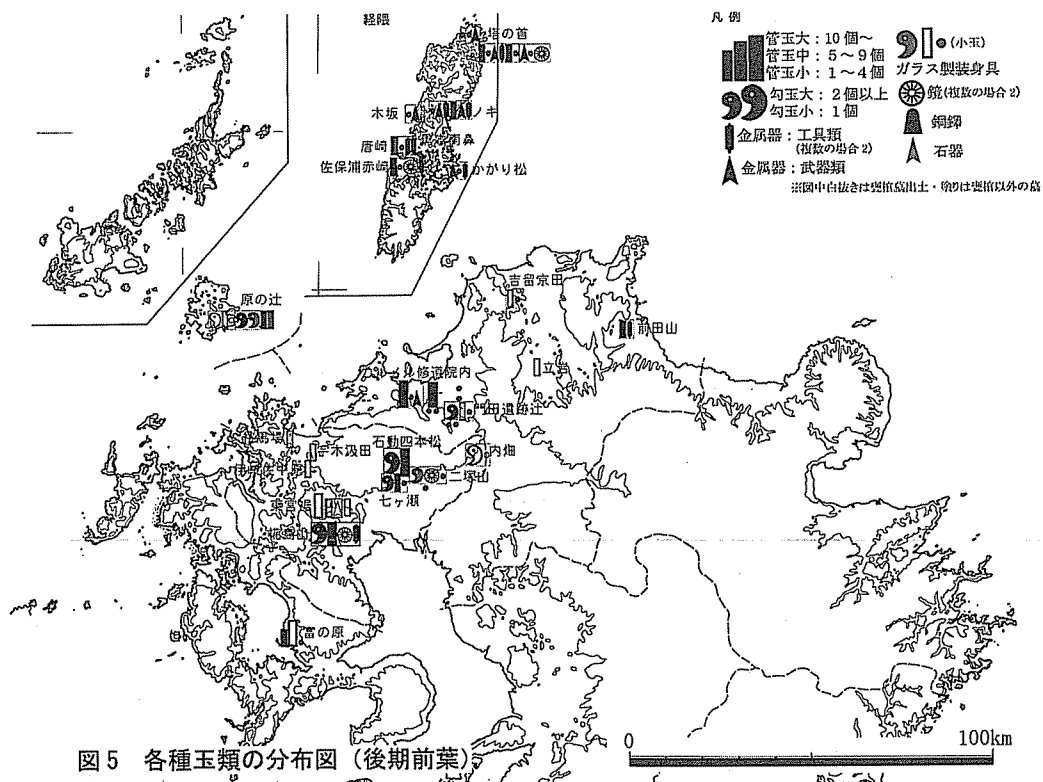
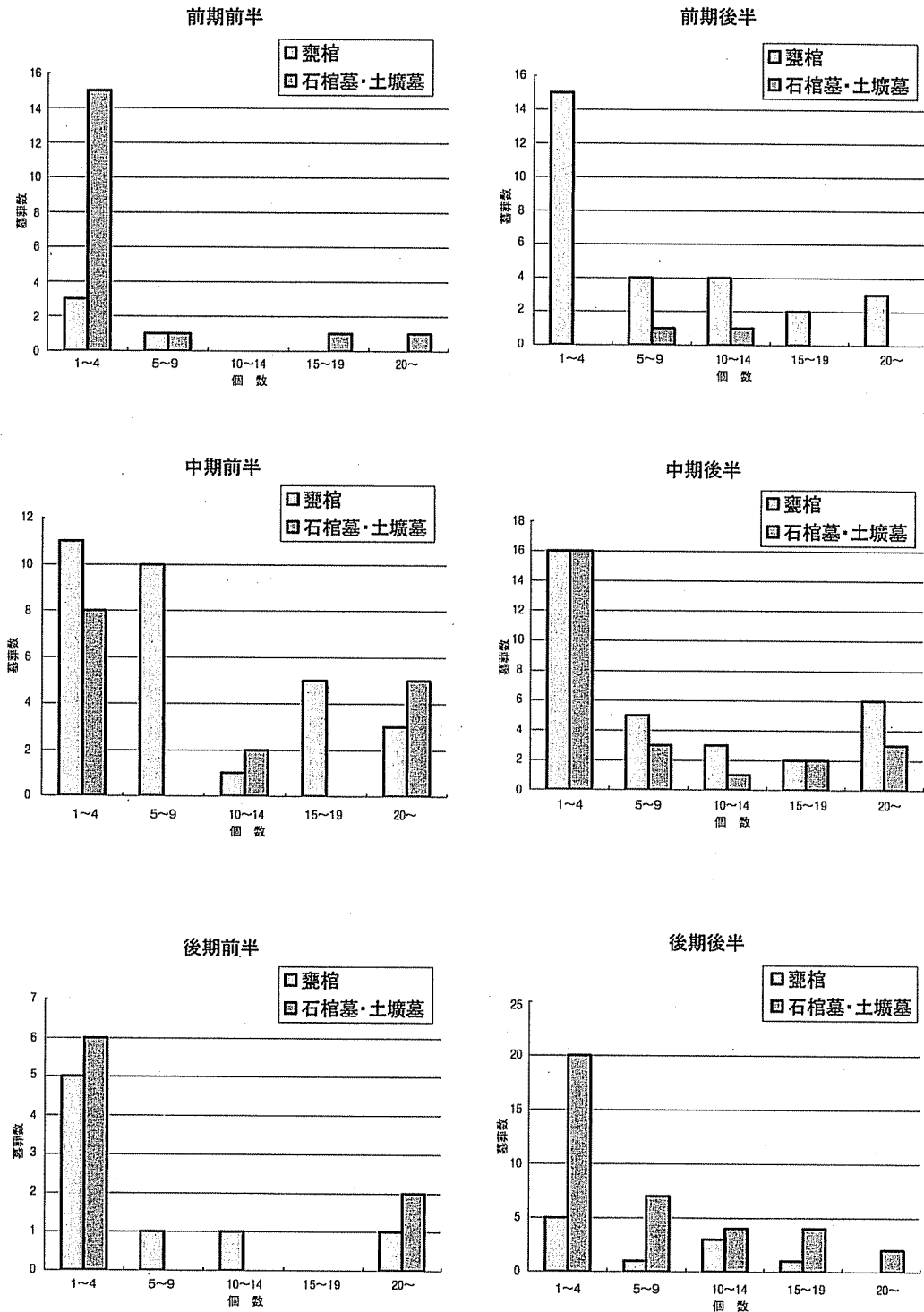


表2 時期・墓葬別の管玉保有量表





宇木汲田遺跡や天神ノ元遺跡で甕棺墓が造営され、多寡の差はあるが多くの甕棺墓に玉類が副葬される。反面、甕棺以外に石製装身具が伴う事例がある。吉武高木遺跡では甕棺墓群中、木棺墓を数基採用し、石製装身具が集中する。吉野ヶ里遺跡では、多くの甕棺墓群中に土壙墓をいくつか築造しており、これに石製装身具が伴う。この土壙墓は甕棺墓群からは一定の距離を置く、或いは墳丘を持つなどということはない。青銅器とガラス製管玉をもって墳丘に埋められたのは甕棺墓の方であって、優位性はない。ただし、甕棺墓に埋葬された人々との違いがあることは確かである。佐賀：大友遺跡では、墓葬の年代が不明のため図中に示せないものがあったが、石製装身具を持つ墓葬のうち甕棺墓が7基に対して配石を持つものなどの土壙墓が20基ある。また、同じ装身具である貝輪を持つ墓葬は31基、管玉・勾玉は27基とほぼ同数ながら、両者は共伴しない。大友遺跡の支石墓にも甕棺墓が埋葬主体として取り入れられており墓制における折衷が進んでいる状況はあるものの、石製装身具は基本的に土壙墓に伴う傾向があるとともに、他の装身具と一線を画しているようである。佐賀：増田遺跡例では、遺跡形成期から区画をもつ墳墓が出現する前段階まで甕棺墓に混じって木棺墓を少数築造し、磨製石剣や柱状片刃石斧など大陸系の石器を中心とした副葬品を木棺墓に集中させている。甕棺墓が345基中6基(1.74%)、木棺墓が77基中9基(11.69%)である。増田遺跡を特徴づけるのは、擬朝鮮系無文土器牛角把手付長頸壺を利用した甕棺墓が墓群の形成期に築造されていることである。被葬者像に想像を膨らませるならば、遺跡形成に関与した渡来系の人々のうち成人が木棺墓に、小型棺の擬朝鮮系無文土器牛角把手付長頸壺を利用した甕棺墓に渡来系人物の子供が埋葬されたのかもしれない。さて、木棺墓が副葬品を持つ率が高いことは指摘したが、これが青銅器や鉄器を持つことはなく、突出した身分差を示すことはない。大陸系の石器を持つことからすれば、木棺墓の故地である朝鮮半島の文化との関連を示す(福永 1996)。

このように、吉武・大友・吉野ヶ里・増田遺跡で、甕棺墓の拡大と勾玉・管玉の副葬習俗との融合段階を経たのちに、甕棺墓以外の墓制も少数派ではあっても築造され続け、玉類とがつながりを示す事例も存在する。一方で石棺墓・土壙墓と甕棺墓が混在する遺跡において、副葬品をもつものが、甕棺墓に限られるという現象を見ることが出来る。そして多くは、その原因に明確な身分的違いを見出せない。これは言い換えれば、勾玉や管玉が単に権威者の装身具となる前に、墓葬の違いや共伴遺物の排他性を示す何か別の意味を持っていたということである。

## 2. 使用状況からみた石製装身具の意味

弥生時代の石製装身具は、先述したように死者に伴って出土することが多い。時にそれは、豊かな青銅器類とともに出土し、葬られた人物の生前の社会的身分・地位の高さをうかがわせる。しかし、これらの玉が死者に伴うようになったのは、王や権威の誕生前からである。ここでは、石製装身具がどのような意味を付与されていたのかを、使用状況から考えてみる。

### 2.1. 石製装身具とその他の副葬品

石製装身具は、先述したように青銅器などのその他の副葬品とともに豪華に死者を飾る場合もあれば、単独でつましく輝く場合もある。ここではその他の遺物との共伴関係を見てみることにしよう。

表3は、石製装身具(ここでは石製の玉類と同じ機能を果たしたとして、ガラス製の勾玉・管玉も含める)と、その他の遺物との共伴頻度・排他性の程度を遺跡ごとに分類したものである。「共伴なし」は、石製装身具を持つ墓葬において共伴事例がない遺跡、「共伴しない」は他の墓葬には鉄器

類・青銅器類・石器類の副葬があるのに、石製装身具の墓葬には意図的にそれらを入れなかったと思われる遺跡、「共伴あり」は石製装身具がその他の副葬品と共伴している遺跡である。

前期前半は、青銅器は勿論だが他の石器類とも共伴しない。後半になっても、共伴は基本的にない。ほか、数遺跡が排他的な傾向を見せている。このように、前期は他の遺物の共伴はない時期であるといえる。宇木汲田遺跡では金海式期になって青銅器の副葬が始まるが、石製装身具のみ：3基、青銅器のみ2基と完全に分離している。飯倉唐木遺跡でも、他に細形銅剣片や素環頭太刀を持つ墓葬はあっても共伴しない。

中期前半になると、共伴しない遺跡がある反面、青銅器類と一緒に副葬が見られるようになる。共伴に非積極的な遺跡からみると、吉野ヶ里遺跡は石剣の切っ先が入るものがあるが、戦死者の可能性もある。この例を除くと他に石製装身具とは別に貝輪や鉄刀子が出土しており、共伴を避けている。

表3 装身具とその他副葬品における共伴関係

	共伴なし	共伴しない（排他的）	共伴あり
前期前半	東入部 礫石A・B 板付 黒土原 天久保 新町 三国の鼻 中道檀 周 船寺 井田用会 松木		
前期後半	笛吹 藤崎 剣塚 押川 今宿 大坪 I 松ヶ上 天神ノ元 釈迦寺	観音堂II 石ヶ崎 東山田一本杉 鍋島 本村南行石 飯倉唐木 宇木汲田 大 友	吉武
中期前半	高津尾3 南薫稻荷 石丸 押川浜郷 甲条神社 村徳永J 原の辻 良積	高木 下清水 吉野ヶ里 椎ノ浦 大友	吉武 釈迦寺 本村龍 神ノ崎 宇木汲田 天神ノ元 津留 増田VI
中期後半	牟田辺 井手尾 森園II 黒塔A藤の 尾垣添 長倉 西尾 帯田 黒山	蓆田青木 鎌田原 葉山尻 岩野富地原 梅木 下稗田 鶴崎 柏崎松本	中原 山本峰 久里大牟田 景華園 三雲南小路 吉野ヶ里 志波屋六本 松乙 宇木汲田 前田山 原田 上月隈 みやこ 立岩
後期前半	カルメル修道院 原の辻 門田辻田 吉留京田 今福 弥永原 内畑 伊岐 佐中原 セヶ瀬	富の原B 宝満尾 石動四本松	良積 塔の首 枕島山 東宮裾 黒 木南鼻 ガヤノキ 佐保赤崎 唐崎 かがり松原 経隈 木坂 二塚山
後期中～	度島中学校運動場 貝元 中野の辻 上清水 亀山 一本木 塩鶴A 干隈	田島長島 桜馬場 汐井掛 桶田山 宮 の前C 狐塚南 立石 宮の下 穴ヶ葉 山	平原 栢の木 徳永川ノ上C 八幡 山 三雲寺口 上大隈平塚 郷屋 白蓮江浦第2 ハロウ 観音鼻 中 原 内橋登り上り 野方久保1次

薄い文字は、共伴例が極少数で本来非積極的な傾向にある遺跡。

大友は先述の通である。共伴する遺跡では、前時期より共伴事例が見られるいわゆる首長墓とされる吉武遺跡で、銅剣や鏡と共に副葬されている。注意したいのは「共伴あり」に含めた宇木汲田・天神ノ元・増田Ⅶ・増田津留の4遺跡である。宇木汲田遺跡では、石製装身具のみ：7基、青銅器類のみ：4基で、石製装身具と青銅器が共伴するのは1例のみである。天神ノ元遺跡も共伴例は1例のみで、その他の副葬品はなく元来石製装身具以外を使用しない遺跡だ。増田Ⅶ遺跡も共伴例は1基のみ、しかも石製装身具を持つものが本例のみであり、その他は石器を1～2点持つばかりである。増田津留遺跡も共伴例は1例のみ、他は排他的な状況である。こうしてみると、この4遺跡も本来は共伴には非積極的なものであり、積極的に共伴する例は僅かとなる。

中期後半になっても、この傾向は変わらない。排他的な鎌田原遺跡では、その排他性が顕著である。3号木棺墓は、多種・多量の玉類を持ちながら、青銅・鉄製品は見当たらない。反面、他の土墳墓や木棺墓6基で銅釧・銅剣などが副葬されているのである。前半と同様に、宇木汲田遺跡では石製装身具と青銅器との共伴例は、各々の単独のものと比べれば僅かである。原田遺跡は銅鐸という一風変わった青銅器と共伴しているが、石製装身具と青銅器の共伴例は1例のみである。ほか、トーンを落としているものは前段階と同様に本来は排他的な傾向をもつものであり、全体としては、やはり石製装身具とその他の副葬品とは結びつき難いことが分かる。

後期になっても、これまでと状況は同様である。排他的な遺跡の石動四本松遺跡では、石製装身具は甕棺墓、鉄器は石棺墓・土墳墓という墓葬の違いを見せる。汐井掛遺跡では、鉄器のみ33基・石製装身具のみ21基・鏡のみ9基、うち鉄器と鏡の共伴例が1例、石製装身具との共伴例は皆無であり、3者が完全に分離している。共伴する遺跡は一見増加する。しかし、大半は対馬や五島の島嶼部の遺跡である。ここでは、後期に盛んに石棺墓を築造し、豊富な青銅器を副葬しており、副葬品がないもののほうが逆に珍しいとも言える。こうした一部地域的な傾向を排除すると、平原遺跡の王墓が、最も青銅器類と装身具に彩られた墓葬というのみである。

以上から、弥生時代の石製装身具は以外にも青銅器や鉄器類などとは共伴しないことがわかった。ここで分析対象とした遺跡は、あくまで装身具を持つ遺跡であって、他の青銅器類・鉄器類を持つ遺跡が含まれないことも考慮すれば、豊富な青銅器類とともに出土することは実はまれなことであり、権威者のアクセサリーというイメージからは程遠いことを感じざる。石製装身具は一部において権威の象徴であるが、それ以外でもあったのである。

## 2.2. 石製装身具の保有状況1

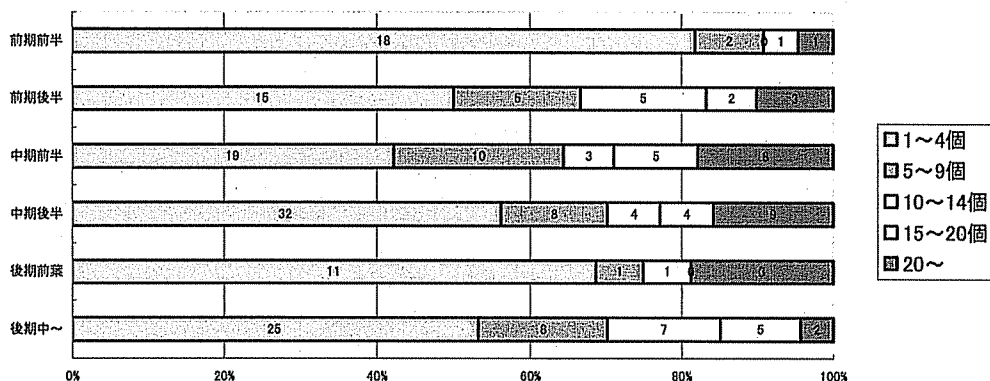
勾玉や管玉は、出土状況から推して概ね首飾りとして使われたようである。1個ないし数個の勾玉と、十～数十個の管玉を組み合わせてネックレスを作っている。或いは管玉でブレスレットや冠に匹敵する髪飾りを作っていた例もある。勾玉や管玉が全てこうした状態で使用されたのか、ここではそれを検証してみる。表2・3は管玉の個数を区切り、それに応じた墓葬の数を時期別に表したものである。勾玉は個数が限られ、また大幅な個数間の格差がないのでここでは除く。玉の総数を墓葬数で割ると、極端に多い墓と少ない墓とが均されてしまうため、墓相別にした。

一見して分かることは、僅か1～4個程度しか持たない墓葬が各時期とも多いということである。前期前半の15個以上を持つ各1例は、どちらも支石墓であり、朝鮮半島からもたらされた首飾を被葬者が着装し、そのまま埋葬したと見られる。前期後半から、個別に保有する数が増えるが、大半は10

個以下であり、良くてブレスレットを作れる程度かと思われる。多数の石製装身具を持つ例としては、前期末から青銅器の副葬を始める吉武遺跡群大石地区で51号甕棺墓（管玉11・細形銅剣）・71号甕棺墓（管玉38・青銅製品）、高木地区：109号甕棺墓（管玉10）・110号甕棺墓（勾玉1・管玉74・銅釧）・117号甕棺墓（勾玉1・管玉42・細形銅剣）・1号木棺墓（管玉20・細形銅剣）・2号木棺墓（勾玉1・管玉135・細形銅剣）・3号木棺墓（獣形勾玉・管玉95・細形銅矛・細形銅剣・多鈕細文鏡）と、集中的な玉類の保有が見られる。中期後半には立岩遺跡28号甕棺墓で553個という突出した数をもつ墓葬もある。これらはまさに、特別な人間の装身具である。しかし、これらを除けば先述のように1基（一人）が保有する数は非常に少ない。

吉野ヶ里遺跡では2000基、吉武遺跡でも1000基を越える甕棺墓が発見されている。無論、弥生時代にはこのほかにも多数の甕棺墓や石棺墓等が築造されており、そうした中で中期以降、上述した100個に近い、或いは100個を超えるような石製装身具と青銅器類を保有する墓葬についてみれば、それはまさに権威者の飾である。しかし、数個であっても玉を持ち得ることもまた、数万の持たざる墓葬からすれば、看過することの出来ない現象である。権威者の装身具が誕生する以前、僅かな玉は、権威とは別の持つことに意味のある存在として、使われていたと予想される。

表4 管玉の時期別保有個数の状況



### 2.3. 石製装身具の保有状況2

佐賀県：天神ノ元遺跡は前期後半；伯玄式期から埋葬を始め、金海式期から須玖式を中心に52基の甕棺墓をようする墓地である。図7のように、金海式期までは集中して埋葬が行われ、城ノ越期から若干墓同士がバラつき始め、汲田式以降は完全に2グループに分かれてしまう。ここで、東側をAグループ、西側をBグループとして石製装身具の保有状況を見てみよう。城ノ越期の段階では、K-5甕棺墓が1個、K-38甕棺墓が4個の管玉を持っており、墓葬はこの2基を基として、二つのグループを形成していく。汲田期になると、BグループのK-37甕棺墓が15個、AグループでK-2・K-3・K-4・K-43甕棺墓が5～6個ずつ保有している。須玖期には、BグループでK-27・28が各々1個、AグループではK-1・K-40・K-48がそれぞれ1個・16個・12個の管玉を保有している。汲田期ではAグループで4/5基=80%、前段階からBグループは一人が占有する傾向にあり1/6基=16.7%、須玖期にはAグループで3/4基=75%、Bグループで2/3基=66.7%とおおよその成員が保有していたようだ。Bグループでは、一人による占有があったようだが、K-27・28甕

棺墓が1個ずつ持っており、若干の差はあっても玉類は成員が持つもの、持って意味をなすものとした、と考えられる。

佐賀県：礫石A遺跡は、久保泉丸山遺跡・黒土原遺跡等とともに、支石墓群と思われる遺跡である。前期前半は、成人が土壙墓で小人には壺棺を採用し墓域をそれぞれ分けている。前期前半の成人9基のうちSP38・SP51・SP52・SP56・SP46の5基が1～4個の管玉を持っており、SP54は土製の勾玉を持っている。ここでも成人のおおよそが玉を持っていたことになる。

約130基の壺棺墓からなる宇木汲田遺跡は、6つの単位家族による共同墓地であり、青銅器などの副葬品を持つものは家長的存在とされる。各グループで2～3基の壺棺墓が、石製装身具を持つ。

こうした状況から、礫石A遺跡や天神ノ元遺跡は成員が、宇木汲田遺跡のような大きな集団になると各グループが玉類を持つことに意味があったのだろう。前項でみたように、青銅器とは共伴せず、玉そのものに意味があった。石製装身具を持つことは、権威や身分の高低を示すため意外の彼らの何らかの印や意思表示であり、共有することで家族や集団内での結び付きを意識し、強化するためのものではなかったかと思われる<sup>1)</sup>。

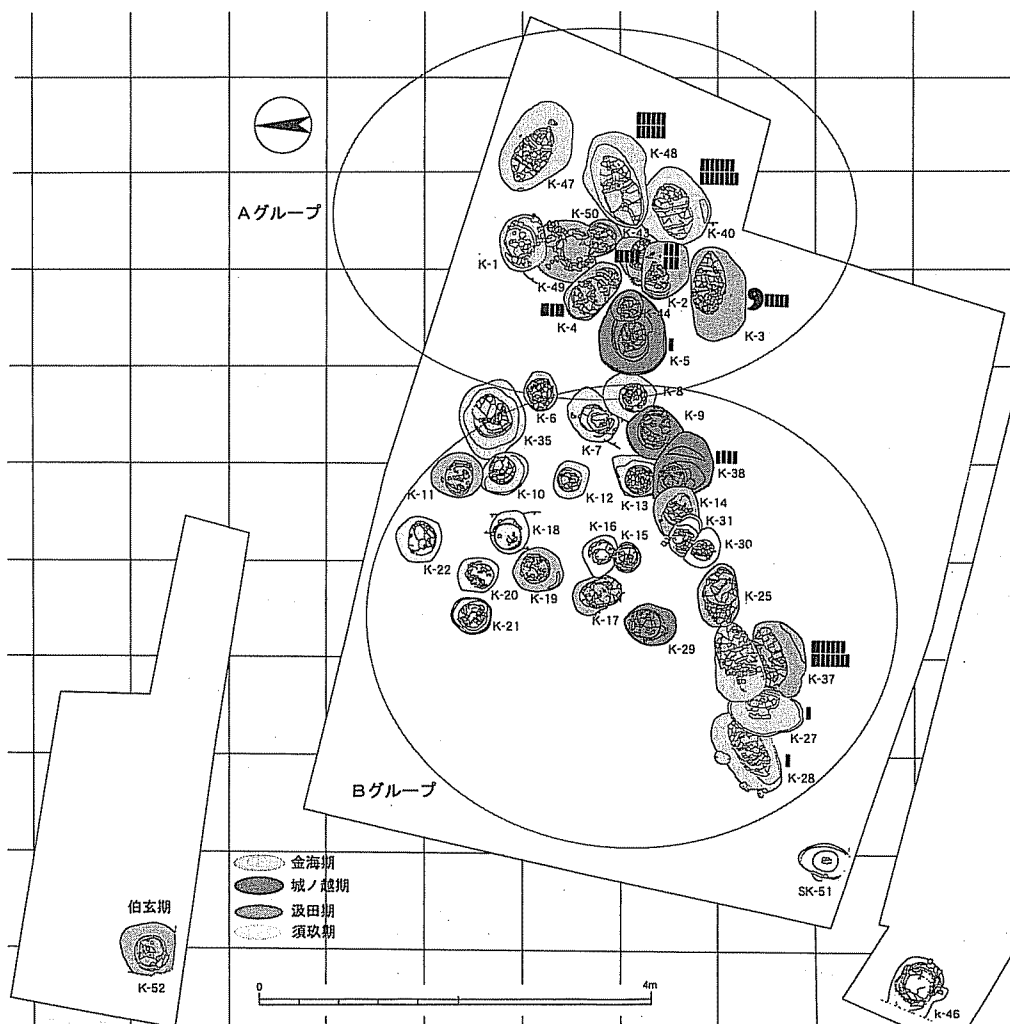


図7 天神ノ元遺跡壺棺墓分布図 (『天神ノ元遺跡 (3)』より 一部改変)

## 2.4. 石製装身具の役割

石製装身具が他の遺物、特に青銅器類や鉄器類とは排他的な傾向になることがわかった。しかし、最終的には伴うものに変化する。ここではそうした変化過程をさぐり、そこから本来石製装身具が持っていた意味や役割について考えてみる。まず、排他的ながらどのような遺物と共伴するようになるかを見てみよう。表5上段に宇木汲田遺跡、下段にその他の遺跡の中期までの遺物の組み合わせを示した。表集の「K数字」は甕棺墓を示し、保有する遺物の列に記入している。そのうち重複するものは下線を付している。

表5 宇木汲田遺跡及びその他の遺跡における玉類と青銅製品の共伴関係

汲田	玉 類	青銅（鉄）武器類	青銅（鉄）武器以外
伯玄	K86 K87 K88		
金海	K94 K111 K19	K61 K18（剣）	
城ノ越	K59 K60 K75	K32（剣）	
汲田	K95 K119 K124 K76K81 <u>K64</u> K47 K73	<u>K12</u> K129（剣） K58 K17（矛）	<u>K64</u> （釧） <u>K12</u> （鏡）
須玖	<u>K11</u> K15 K24 K25 <u>K38</u> <u>K41</u> K43 K45 K50 <u>K112</u>	<u>K11</u> K6（剣） K37 <u>K41</u> （矛）	<u>K112</u> （釧） <u>K38</u> （釧）
他遺跡 前・後半 ～ 中前半	神ノ崎		鉄斧
	天神ノ元	鉄鏃	
	釈迦寺	銅剣	鉈
	本村館		鏡・鉈
	甲条神社		刀子
中期後半	みやこ		鏡・刀子
	立岩（ガラス管玉）		鏡・刀子
	志波屋六本松乙		刀子
	原田		銅鐸
	上月隈	銅剣	
	久里大牟田	銅戈・銅矛	
	山本峰	銅剣	
	中原	鉄戈・鉄矛	
	景華園	剣	

宇木汲田遺跡では、金海式期には青銅器のうち、武器類が副葬品として使用されるようになるが玉類との共伴はない。汲田式期にいたって銅釧という装飾品とは共伴するようになる。須玖期になっても銅釧との共伴2点、武器類との共伴2点で、玉類は武器類とは基本的には共伴せず、武器以外のものとは共伴するようである。これは、その他の遺跡でも同様であり、特に中期前半頃までは鏡や工具類との共伴はあっても、銅剣・銅矛とは結び付きにくいようだ。吉武遺跡群での様子を表6で見ると、前期後半大石地区のK51号甕棺墓（金海期）で、管玉と銅剣の共伴が1例あるが、それ以外は武器類単独である。高木地区の前期後半、8基の副葬品を持つ甕棺墓のうち玉類と銅剣の共伴がやはり1例あるが、その他は玉類のみ・青銅器のみであって、青銅器と共伴しても（K110）銅釧である。次の城ノ越期の首長墓になって、青銅器武器類と玉類がセットになっている。

以上、前項も含めて整理すると玉類は青銅器とは基本的に共伴しない。共伴するとすれば鏡や工具類である。青銅器の大半は武器類であるので、玉類と武器類が排他的関係にあるといえる。前項で紹介した立岩遺跡や鎌田原遺跡においては、玉類を豊富に持っていたり、或いは玉類と鏡をもっていたり、武器類は外されている。圧倒的に玉類を持つものと、武器類を持つものがそれぞれ存在するのである。排他的関係にある玉類と武器類とは、優劣関係というよりそれらが持つ役割や意味が違っていると考えられる。

青銅武器は威信材として、死後副葬品として墓に納められた。青銅武器は中期後半の頃から埋納さ

表6 吉武遺跡群遺物一覧

	<墳丘墓>	<大石地区>	<高木地区>
前期後半		K51:細形銅剣・管玉・朱 K45:細形銅矛・細形銅剣 K140:細形銅剣 K10:磨製石鏃 K 1:細形銅矛片 K70:細形銅戈 K60:磨製石剣 K67:細形銅矛	K109:管玉 K119:小壺 K125:石鏃 K110:勾玉・管玉・銅釧 K117:細形銅剣・勾玉・管玉・ガラス小玉 K100:細形銅剣 K115:細形銅剣 K116:細形銅剣
中期前半		M1:細形銅戈・細形銅剣 M5:細形銅剣 K53:細形銅矛・磨製石剣 K71:銅製品・朱・管玉 K81:磨製石剣	M1:細形銅剣・管玉 M2:細形銅剣・勾玉・管玉 M3:細形銅剣・細形銅矛・細形銅戈・多鈕 細文鏡・勾玉・管玉
中期後半	K61:鉄剣 K75:細形銅剣・把頭飾 K77:細形銅剣・鏢 K62:鉄素環頭太刀・前漢重圈文星雲 鏡 K64:刀子 K5:鉄剣・鉄鏃	K67:素環頭太刀 K28:鉄剣・櫛	
後期	石蓋土城墓1:ガラス小玉 M:鉄剣・勾玉・管玉・算盤玉・ガラ ス小玉		※K:甕棺墓 M:木棺墓 ※ゴシック体は玉を持つものを示す

れるようになる。この現象については、もともと青銅武器を写して祭器にしていた武器形木製品の祭祀の象徴性が高まり青銅武器の祭器化を促したという見解がある。こうして青銅器は個人のものが集団のものへと変わったわけであるが、玉類もこれまでに見てきたように同様に個人個人が身につけていたものが、集団を代表する者の持ち物へと変化した。農耕文化とともに伝播してきたし、木製品に姿を移して祭器となったのだから、青銅武器自体も農耕儀礼に関する祭器としての性格を少なからず持ち合わせていただろうが、こうした青銅武器が入ってくる前、玉類が最も簡単に、しかも常時農耕文化とともに伝播した新たな世界観・死生観を示す、或いは人々に思わしめるような呪具ではなかっただろうか。そうしてそれが、集団の長や、立岩遺跡28号墓被葬者に想定されるようなシャーマンなどの農耕儀礼を司った人物の持ち物へと特化されていくと考えられる。

### 3. 勾玉と管玉の系譜への予察

以上まで、弥生時代の勾玉・管玉の導入の契機と意味・使用の変化を見てきた。最後に、これらの玉類の系譜について、若干の私見を述べておく。

弥生前期前半の礫石A遺跡・大木遺跡で、管玉も勾玉も墓葬に伴って出土しており、弥生時代当初から両者には基本的に同じ「使われかた」や「意味」が与えられていたと考える。縄文管玉が残るのも、それで「用」が事足りたからである。礫石A遺跡・石蓋土壙墓46の勾玉は、縦方向の貫通孔があり、縄文の玉そのものである。また、他の墓葬に管玉がありながら、この勾玉は単独で出土している。縄文勾玉は、中期前半になり青銅武器や鏡に伴い階級的に上位の墓に入る、また権力表示力を持たないので管玉と結びつくともされるが、中期前半を待たずとも縄文の勾玉は墓に入るし、また管玉と結びつかなくても単独で役割を果たしている。弥生の管玉も両者は独自でも意味をなしていたと思われる。それは、先述したように農耕民のアイデンティティーの表示である。弥生時代の管玉と勾玉の単独例が多いのは事実であるが、これは管玉と勾玉の生産性の問題、故地である朝鮮半島でのそれぞれの使われ方や共伴の頻度、地域性を検証することが先決である。

勾玉が死者に伴う・伴わない＝弥生と縄文の違いについてであるが、縄文時代の勾玉は、魂を引っ掛け呪縛して留めおくためのもの、ゆえに死者には不要のものとされる。そうすると、死者とは魂が抜け出でしまった抜け殻（空）となる。しかし、それでは死霊を恐れたためとされる屈葬とは矛盾が生じる。死霊が暴れ出ないよう、むしろ死者に勾玉を持たせた方が理解しやすい。現在のところ、縄文時代の墓葬からは勾玉や管玉が出土してはならず、生者・死者と用・不要については明確にはできないが、私はこれらの玉が生命そのものの象徴、或いは自分の存在を守る象徴や護符であり、来世観や死後の別の世界観を持った（金関1996・ハイネ＝ゲルデルン1961）弥生人が死後も身につけたと推察する。また、これは玉類の「意味」だけでなく帰属がどこにあったのかも考慮しておく必要がある。縄文時代の墓葬における副葬品の所持は極めて少ない。個人レベルの所有物でなく、集団やシャーマンのように限定された人のものであったなら伝世された可能性があるからである。また、特別な場でのみ装着し、平時にはどこかに飾っておくということも考えられよう。縄文時代に集団・特定者のものであったとすると、弥生早期に一旦個人レベルになり、また集団・特定個人のものになるという、一見奇妙な変遷をたどることになる。これは、農耕文化影響の第一波と第二派を受けたときの、受容体制の違いによるだろう。弥生早期には完成度の高い農耕が伝わっており（山崎1991）、集団の組織は急々のうちに変化せざるを得なかった。そうした時、石製装身具はそれなりの農耕文化民を表示し、



リーダー的存在に求心力を与える役割をある程度果たしただろう。それ以上の効果は、より視覚的に、時には築造という行為を通して訴える支石墓が担った。だからこそ、水稻農耕を開始したころの地域、或いは突出した人物の登場を見ない地域において、支石墓の玄界灘沿岸より遅れた築造（残存現象）が見られるのだろう。

既に久保泉丸山遺跡で蛇紋岩製のエンタシス状の管玉、所謂縄文の管玉が支石墓に伴っていること、礫石A遺跡では縄文の勾玉が墓に伴っていることから、管玉や勾玉を故地である朝鮮半島と同じように使用する素地が、早い段階から準備されていたはずである。私は、その素地を縄文時代後・晩期に始まる初期農耕文化ではないかと推察する。九州の縄文人たちは情報として、勾玉や管玉を知っており、半島の玉に倣い緑色の蛇紋岩を材として選択し、玉類を作製していた。そうして、本格的かつ直接的な農耕文化の流入に接したが、その際にはそれまでの素地を活かしスムーズに弥生的な使い方へと変転が図られたのだろう。

### 終りに

以上、弥生時代の石製装身具の導入と展開、縄文時代の玉類との関係についての予察を述べた。弥生時代の石製装身具の使われ方や意味の変化を辿る作業のなかで、石製装身具は元来、本格的な農耕を開始した農耕民の証しとして受け入れたものであると結論付けられた。当該時期、既に故地である朝鮮半島で勾玉や管玉は権力者のものとなりつつあり、無機質に美しいものに転じようとしていた。そうした玉に縄文時代から弥生時代の過渡期にあった九州の人々が、改めて命を吹き込んだのである。そうすることが出来たのは、農耕文化という大きな母体を共有していたからであろう。

海を挟んで朝鮮半島や大陸と対峙する九州は、いつの時代も繰り返し互いの文化を刺激しあったに違いない。既に、縄文時代の初期的農耕が確実に年代も遡りつつある中で、大陸における農耕文化中の玉文化と九州における玉文化については、注視しておく必要がある。無論、東日本の翡翠の玉に代表される玉類の動向も同様である。

今後、縄文時代の玉類の導入と展開、そして縄文・弥生の玉類の形質上の検討を重ね、上記の予察を検証したい。

### 註

- 1) 礫石A遺跡の時期の碧玉製、国内産の碧玉製管玉が確認されず朝鮮半島製の可能性を持つ。天神ノ元遺跡はアマゾナイト製勾玉が含まれることから、やはり朝鮮半島からもたらされた可能性がある。こうした場合、朝鮮半島での使用状況と変わらず、首飾りや腕飾の状態で搬入されたとも考えられる。井田用会・天久保などの支石墓出土品からも類推できる。当該時期の出土例は、図1で見たように多くない。わが国への搬入の頻度も、それを入手する機会も多くはなかっただろう。成員が欲するだけの玉類を、欲するときに入手するというのは困難なことだったと思われる。天神ノ元遺跡の汲田期Aグループは、個人の保有数では、Bグループに劣る。AグループK-3 甕棺墓がアマゾナイト製勾玉を持つことは次の須玖期における優勢を暗示する。21個の管玉+1個の勾玉=一連の首飾りをK-3 甕棺墓を中心に共有した可能性は考えられないだろうか。周辺遺跡での出土傾向から推して、入手頻度はより少なかったと思われる礫石A遺跡においても、同様の分配行為を想定しておきたい。

## 文 献

- 安部裕久 1993「宗像地域の墓制」『弥生時代の墓制を考える』宗像市文化財講演会資料、pp. 61～97、宗像市教育委員会。
- 大坪志子 2003「縄文の玉から弥生の玉へ」『先史学・考古学論究』Ⅳ、pp. 415～436、龍田考古会。
- 金関 恕 1996「1 総論 B 墓」『弥生文化の研究』8、pp. 11～12、雄山閣。
- 木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念論文集、中巻、pp. 542～591、同朋社。
- 木下尚子 1999「装身具と権力・男女」『古代史の論点』1、pp. 187～212。
- 木下尚子 2003「農民的装身具の成立」『先史学・考古学論究』Ⅳ、pp. 437～460、龍田考古会。
- 甲元真之 1992「管玉に関する覚書」『究斑』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集、pp. 15～24、埋蔵文化財研究会。
- 松本直子 2000「『縄文』と『弥生』のカテゴリーに関する人工物の動態」『認知考古学の理論と実践的研究』pp. 113～141、九州大学出版会。
- 橋口達也 1979「4. 甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI、中巻、pp. 133～185。
- 福永伸哉 1996「5 木棺墓」『弥生文化の研究』8、pp. 117～126、雄山閣。
- 藤尾慎一郎 1989「九州の甕棺—弥生時代甕棺墓の分布とその変遷—」『国立歴史博物館研究報告』第21集、pp. 141～205。
- 森 貞次郎 1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念文化論攷』、pp. 307～341。
- 森 貞次郎 1982「[10 宇木汲田遺跡 (6) 管玉]」『末慮園』、pp. 311～314。
- 柳田康雄 2000「王墓とは」『奴国王の出現と北部九州のクニグニ』須玖岡本遺跡発見100周年記念展、pp. 19～21、春日市奴国の丘歴史資料館。
- 山崎純男 1991「稲作の初現」『季刊 考古学』第37号、pp. 17～22、雄山閣。
- 山崎純男 2005「西日本縄文農耕論」『韓・日新石器時代の農耕問題』第6回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集、pp. 33～55。
- ハイネ＝ゲルデルン／竹村卓二訳 1961「勲功祭宴と巨石の世界観」『古代学』10巻1号、pp. 25～35、古代学協会（原典：ハイネ＝ゲルデルン『巨石問題』）。

## 報 告 書

- 財団法人北九州市教育文化事業 1991『上清水遺跡Ⅱ区』北九州市埋蔵文化財調査報告書第100集
- 財団法人北九州市教育文化事業 1987『井手尾遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第56集
- 財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 1990『高津尾遺跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第89集
- 財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 1992『高津尾遺跡5』北九州市埋蔵文化財調査報告書第115集
- 財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 1991『高津尾遺跡4』北九州市埋蔵文化財調査報告書第102集
- 財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 1992『高津尾遺跡5』第115集
- 法政大学文学部考古学研究室 1993『高津尾遺跡17区発掘調査報告書』
- 財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 1993『高津尾遺跡6』北九州市埋蔵文化財調査報告書第129集

財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 1986『郷屋遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第44集

福岡県教育委員会 1996『徳永川ノ上遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第7集

築城町教育委員会 1984『安永遺跡』築城町文化財調査報告書第1集

行橋市教育委員会 1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集

行橋市教育委員会 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集

大平村教育委員会 1993『穴ヶ葉山遺跡』大平村文化財調査報告書第8集

岡垣町教育委員会 1991『黒山遺跡群』岡垣町文化財調査報告書第12集

宗像市教育委員会 1991『名残Ⅳ』宗像市文化財調査報告書第29集

宗像市教育委員会 1986『宗像 埋蔵文化財発掘調査概報 大井三倉遺跡 池浦高田遺跡 吉留京田遺跡』宗像市文化財調査報告書第10集

福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X XⅦ

福岡県教育委員会 1980『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第2集

福岡県教育委員会 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XⅢ

直方市教育委員会 1992『帯田遺跡』直方市文化財調査報告書第13集

福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会 1977『立岩遺跡』

嘉穂町教育委員会 1992『アナフ遺跡Ⅱ』嘉穂町文化財調査報告書第13集

嘉穂町教育委員会 1987『嘉穂地区遺跡群Ⅳ』嘉穂町文化財調査報告書第7集

嘉穂町教育委員会 1997『原田・鎌田原遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第18集

志免町教育委員会 1996『松ヶ上遺跡』志免町文化財調査報告書第6集

福岡市教育委員会 2000『上月隈遺跡群3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第634集

福岡市教育委員会 1974『宝満尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集

森貞次郎 1961「福岡県糟屋町上大隈平塚古墳」『九州考古学』11・12、九州考古学会

粕屋町教育委員会 1994『内橋登り上り遺跡』粕屋町文化財調査報告書第8集

志免町教育委員会 1993『亀山古墳』志免町文化財調査報告書第5集

福岡市教育委員会 1993『席田青木遺跡 1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集

大野城市教育委員会 1999『森園遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第55集

福岡市教育委員会 1995『板付遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第410集

春日市教育委員会 2002『立石遺跡』春日市文化財調査報告書第34集

福岡県教育委員会 1963『福岡県須玖岡本遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書第29集

春日市教育委員会 1993『春日市埋蔵文化財年報』1 平成4年度

那珂川町教育委員会 1984『松木遺跡Ⅰ（下巻）』那珂川町文化財調査報告書第11集

那珂川町教育委員会 1994『観音堂遺跡群Ⅱ』那珂川町文化財調査報告書第33集

福岡県教育委員会 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集

福岡市教育委員会 2004『弥永原5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第830集

福岡市教育委員会 1994『飯倉唐木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第387集

干隈遺跡調査会 1985『福岡市早良区 干隈遺跡』福岡市早良区干隈遺跡発掘調査報告書

福岡市教育委員会 1999『入部Ⅸ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集

福岡市教育委員会 1996『藤崎遺跡第二次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第496集

福岡市教育委員会 2004『藤崎遺跡15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集

福岡市教育委員会 1999『室見が丘』福岡市埋蔵文化財調査報告書第614集

- 福岡市教育委員会 1986『吉武高木』福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集
- 福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群Ⅷ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集
- 福岡市教育委員会 1999『吉武遺跡群ⅩⅠ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集
- 福岡市教育委員会 2000『吉武遺跡群ⅩⅡ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集
- 福岡市教育委員会 1993『野方久保遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第348集
- 福岡市教育委員会 1974『福岡市野方中原遺跡調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 福岡県労働者住宅生活協同組合 1971『宮の前遺跡』
- 福岡市教育委員会 2000『JR 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集
- 福岡市教育委員会 1995『周船寺遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第429集
- 前原町教育委員会 1991『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第35集
- 原田大六1952「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』第38巻4号、日本考古学会
- 鏡山猛 1969「環溝住居址小論(4)」『史淵』第78号九州大学史学会
- 志摩町教育委員会 1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集
- 福岡県教育委員会 1983『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集
- 福岡県教育委員会 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
- 前原市教育委員会 2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
- 二丈町教育委員会 1995『大坪遺跡Ⅰ』二丈町文化財調査報告書第10集
- 福岡県教育委員会 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ⅩⅩⅣ
- 福岡県教育委員会 1975『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅵ
- 福岡県教育委員会 1998『貝元遺跡Ⅰ』九州自動車道筑紫野Ⅰ・Ⅱ建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代の大集落の発掘調査
- 小郡市教育委員会 1986『三国の鼻Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第31集
- 大刀洗町教育委員会 1995『甲条神社遺跡』大刀洗町文化財調査報告書第7集
- 大刀洗町教育委員会 2000『甲条神社遺跡Ⅱ』大刀洗町文化財調査報告書第20集
- 北野町教育委員会 1998『良積遺跡Ⅱ』北野町文化財調査報告書第11集
- 久留米市 1981『久留米市史』第一巻
- 久留米市 1994『久留米市史』第12巻
- 福岡県教育委員会 1999『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』55
- 筑紫野市教育委員会 1986『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集
- 寺嶋克史浮羽町教育委員会 1990『岩野遺跡』浮羽町文化財調査報告書第5集
- 瀬高町教育委員会 1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第4集
- 久山高史 1994「鳥栖市内畑遺跡甕棺墓出土のガラス製頸飾」『佐賀考古』第1号、佐賀考古談話会
- 佐賀県教育委員会・新郷土刊行会 1979『二塚山』
- 東脊振村教育委員会 1995『石動4本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第19集
- 金関丈夫・坪井清足・金関恕 1961「7 佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会
- 佐賀県教育委員会 1991『志波屋六本松乙遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(13)
- 佐賀県教育委員会 1990『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第100集
- 佐賀県教育委員会 1992『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集
- 佐賀県教育委員会 1986『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(5)
- 佐賀市教育委員会 1987『黒土原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第19集

- 佐賀県教育委員会 1989『礫石遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(9)
- 佐賀県教育委員会 1995『東山田一本杉遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(18)
- 佐賀市教育委員会 1991『村徳永遺跡—J地区の調査—』佐賀市文化財調査報告書第34集
- 大和町教育委員会 1992『尼寺一本松遺跡』大和町文化財調査報告書第17集
- 大和町教育委員会 1989『佐保A・B・C区 池上二本松B遺跡』大和町文化財調査報告書第7集
- 佐賀市 1977「原始(四) 弥生時代の社会と文化6 墓制」『佐賀市史』第一巻
- 佐賀市教育委員会 2002『増田遺群Ⅵ』佐賀市文化財調査報告書第130集
- 佐賀市教育委員会 1994『増田遺跡群Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第50集
- 大和町教育委員会 1981『七ヶ瀬遺跡』大和町文化財調査報告書第2集
- 佐賀市教育委員会 1991『鍋島本村南遺跡』佐賀市文化財調査報告書第35集
- 大和町教育委員会 1992『平成2年度大和町内遺跡確認調査』大和町文化財調査報告書第16集
- 牛津町教育委員会 1995『八幡山遺跡Ⅰ』牛津町文化財調査報告書第6集
- 多久市教育委員会 1975『牟田辺遺跡』
- 武雄市教育委員会 1986『みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集
- 小田富士雄 1968「佐賀県杵島山石棺の出土遺物」『古代学研究』51号、古代学協会
- 佐賀県教育委員会 1967『勇猛寺古墳群』佐賀県文化財調査報告書
- 佐賀県教育委員会 1985『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第8集
- 柴元静雄 1970「東宮裾遺跡発掘調査報告(その2)」『新郷土』257号
- 柴元静雄 1970「北方町東宮裾弥生遺跡」『新郷土』256号
- 武雄市教育委員会 1990『釈迦寺遺跡』武雄市文化財調査報告書第24集
- 唐津湾周辺遺跡調査委員会 1982『末慮園』
- 佐賀県教育委員会 1980『柏崎遺跡群』佐賀県文化財調査報告書第53集
- 唐津市教育委員会 2002『天神ノ元遺跡』唐津市文化財調査報告書第105集
- 唐津市教育委員会 2004『天神ノ元遺跡(3)』唐津市文化財調査報告書第114集
- 相知町教育委員会 1986『伊岐佐遺跡群』相知町文化財調査報告書第1集
- 唐津市史編纂委員会 1962『唐津市史』
- 唐津市教育委員会 1980『久里大牟田遺跡』唐津市文化財調査報告書第1集
- 杉原莊介 1961「6 佐賀県桜馬場遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会
- 呼子町教育委員会 1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集
- 宮本一夫編九州大学文学部考古学研究室 2001『佐賀県大友遺跡』考古学資料集16 研究代表者 春成秀爾『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』
- 鎮西町教育委員会 1998『塩鶴遺跡』鎮西町文化財調査報告書第16集
- 九州大学文学部考古学研究室 2003『佐賀県大友遺跡Ⅱ』考古学資料集30 研究代表者 春成秀爾『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』
- 玄海町教育委員会 1996『長倉遺跡』玄海町文化財調査報告書第4集
- 佐賀県教育委員会 1981『押川遺跡』佐賀県文化財調査報告書第60集
- 伊万里市教育委員会 1988『西尾遺跡—A地点—』伊万里市教育委員会第23集
- 松浦市教育委員会 1973『栢の木遺跡』
- 田平町教育委員会 1992『中野ノ辻遺跡』田平町文化財調査報告書第6集
- 平戸市教育委員会 1979『平戸市文化財調査報告書』平戸市の文化財11
- 平戸市教育委員会 1979『崎瀬遺跡』平戸市の文化財11

- 九州大学文学部考古学研究室 1997『東アジアにおける支石墓の総合的研究』平成6～8年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2））
- 大村市文化財保護協会 1987『富の原』
- 福岡大学人文学部考古学研究室 2004『長崎県・景華園遺跡の研究 福岡県京都市における二古墳の調査 佐賀県 東十郎古墳群の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊
- 松尾 禎作 1950『北九州支石墓の研究』
- 長崎県教育委員会 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集
- 長崎県教育委員会 1977『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第31集
- 小値賀町教育委員会 1997『笛吹遺跡』小値賀町文化財調査報告書第12集
- 長崎県教育委員会 1996『原始・古代の長崎県 資料編Ⅰ』
- 福江市文化財保護協会・福江市教育委員会 1993『一本木遺跡』福江市文化財調査報告書第7集
- 坂田邦弘 1976『対馬の考古学』
- 美津島町教育委員会 1988『かがり松鼻遺跡』美津島町文化財調査報告書第4集
- 長崎県教育委員会 1974『対馬』長崎県文化財調査報告書第17集
- 長崎県教育委員会 1988『中道檀遺跡』長崎県文化財調査報告書第90集
- 韓炳三・小田富士雄 1991『日韓交渉の考古学 - 弥生時代篇 -』
- 豊玉町教育委員会 1980『対馬豊玉町ハロウ遺跡』長崎県下県郡豊玉町大字仁位所在箱式石棺墓群の調査報告

## The introduction and development of stone ornaments of Yayoi period in Kyushu

OTUBO Yukiko

In Yayoi period, the new custom that use curved bead and cylindrical bead for burial accessory started. We have known the custom use cylindrical bead for burial accessory was effect of burial custom of dolmen burial in Korea Peninsula I think the custom use curved bead is effect of burial custom of dolmen burial, too. So I analyzed the number and kind of stone ornament and that is burial accessory of grave in Yayoi period to know how start the custom that use curved bead and cylindrical bead for burial accessory. The new custom extended with jar used for burial smoothly. Dolmen is the symbol of agriculture. So, I guess the reason that the custom use curved bead and cylindrical bead for burial accessory started and extended smoothly is that the curved bead and cylindrical bead in Yayoi based on them of Jomon period